



題字 林 邑一

第22号

平成9年3月31日
阿品台地区
コミュニティーをすすめる会
阿品台公民館
(TEL39-4338)
阿品台地区人口世帯数
平成9年3月3日現在
人口 男 5,137人
10,863人 女 5,726人
世帯数 3,354 世帯



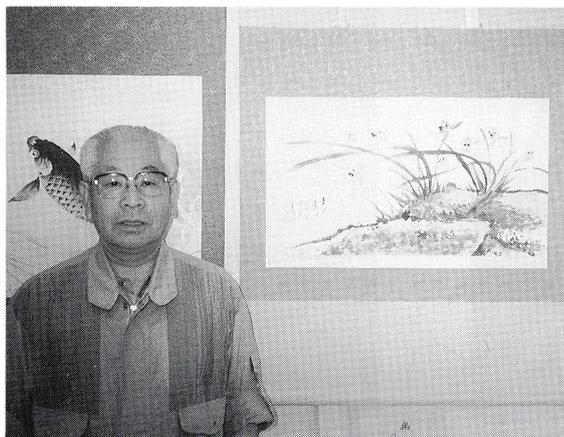
水墨画クラブに入会して

二丁目 川口 義信

で盛況だったと思う。

一人で中途入会だけに、代表から紹介されたときは、小学校の入学式のように真剣で、しかも緊張してみなさんの顔が、みんな先生の顔に見えたものである。

作品と共に筆者の川口さん



水墨画クラブに入会したのは、確か平成六年十月だったと思う。四丁目の先輩が、「面白いよ、入っ

てみたら…」との誘いがあり、趣味の一つくらいあってもよいと思っ

てみた。」「えい、ままよ、そのうちなんとか、なるだろう。」の気持ちで習うことに決めた。

「えい、ままよ、そのうちなんとか、なるだろう。」の気持ちで習うことに決めた。

早速、筆、顔彩、紙、硯、墨など、と言っても、名前のわからないものや種類も

多くあるので、順次教えて貰いながら、一連のもの調達を急いだ。

クラブは月二回、先生は広島から岡原大華先生、「新入生だからと言って、一人だけ特別に教えるわけには

いかん。他の人の手を見て練習すること。絵は一生懸命かくことは当然だが、墨、筆の使い方が大事、キレイに

なくてもよい。絵になっても、その人、その人の好みがあるから、「良し、悪し」の判断は別の問題」



展示作品の一部

さて、筆や墨の使い方を磨けと言われても容易ではなさそう。また、好みと言っても、誰がどんな好みかわからない。要するに水墨画とは、墨と筆で遠近、表裏、山水、点、天地などを表現すればよいと理解したが、私には不可能かも知れない。

わからぬ段階で、人前に出すような展示会は、いくら物事に動かない私でも、面映いものである。水墨画を始めてから、確かに、物を見る眼が変わったような気がする。展示会や展示会があれば出かけてみる。新聞、雑誌の絵や写真にも眼を注ぐ、本も二〇冊を超えた。

水墨画を始めてみて、驚くことばかりだ。第一墨だけを使うのである。墨の濃淡だけで「物」を「物」らしくかくのだから、どこを濃く、どこを淡く、どこを淡くするかが技術だろう。先生の手ほどき

絵の上手な人、いわば画家という人の二人や三人は知っているが、良否の判断もつかない未熟者の私でも、その人達が来いと言えば積極的に足を運ぶようになった。

どおりにはいかない。

「どう、わかったでしょう。」

「はい。」どこが「はい」かと言いたい。先生がかく絵は、「物」が「物」に見えるから不思議だ。

自分の作品の「良し、悪し」が

そんな、殊勝な気持ちで一っばいである。



—— 乾 杯 ——



—— 懇 談 ——



—— 懇 談 ——



阿品台地区新年互例会

と き：1月12日(日) 12:00～14:00

と ころ：阿品台公民館

出席者 阿品台地区の各種団体、官公署、学校及び商店街等各界各層から、多数の出席を得て挙行された。



コミュニティーをすすめる会の山本会長あいさつ



山下市長のごあいさつ



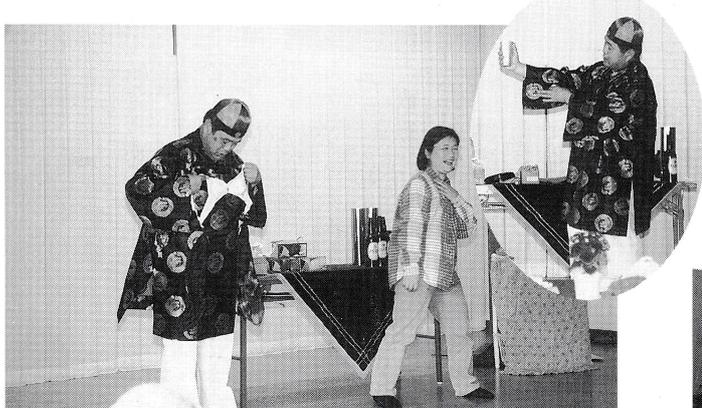
前広島県知事の竹下先生ごあいさつ



保健婦さんの指導で、座ったままで健康体操

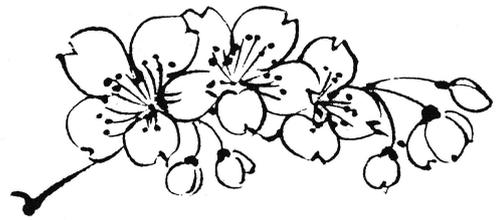


民踊とマジック・ショーで楽しむ



アシスタント（会場から役員の女性）のブラジャーを見事に抜き取った（？）という。

このマジシャン、はるばる中国は広島から来たと言う「チャーシュー・大田」と名乗る人、本職は広島北警察署の、今日は非番のお巡りさん。犯人を取り逃がしたことはあっても、逮捕歴はないと言う。署長は嘆く、「手品に熱中するくらい仕事に熱を入れてくれたらなあ…」と、ユーモアたっぷりのお巡りさん。



ふれあい昼食会

と き：3月12日(水) 11:00～13:30

と ころ：阿品台公民館

主 催 { 阿品台地区コミュニティーをすすめる会
阿品台地区民生委員協議会

招かれた人：80才以上の高年者及び一人暮らしの方
出席者数：56名（欠席者3名）



希望者には、保健婦さんによる血圧測定



お弁当に舌鼓を打ち、話にも花が咲く



さわやかな出会い

広報部 竹下 博美

今を去ること六年前の「ふれあい」で紹介した、「ジャンケン坊や」のこと。と言っても御記憶の方があるだろうか。重複することになるが、先づは、再現してみることにする。

事の起りは、通勤途上の出来事で、通学児童との束の間のふれあいの模様である。

毎朝電停まで徒歩の途中、小学生四～五人のグループに出会う。この子達よくあいさつのできる子で、出会うと必ず「おはよう」の言葉を交わす。非常に感じがよく、毎朝をさわやかな気分にしてくれたものである。

或る朝のこと、このグループの中に一年生の坊やが一人いた。新しいランドセルに交通安全の黄色いカバーをかけていた頃のこと、例によって「おはよう」のあいさつを交わしたところでその一年生坊やが、「おじさん、ジャンケンしよう。」と言って寄って来た。「お、面白い子だな。」と思つて「よし、やろう。」とこれにに応じてジャンケン・ポンとやったら

一発で私の負け、その子喜んだのなんの、右手を上げてガッツポーズノしたら他の子達も次々に挑戦してきた。

結果は五分だったと思うが、勝つた子の嬉しそうな顔、負けた子のチョッピリしよげた顔、こちらら勝つても負けても、さわやかな気分にしてくれる。それ以来、出会うと必ず「おはよう」の後は一勝負しないと、朝の行事が終らないという仲になり、毎朝の出会いがたのしみであった。

近くでこの光景を見ていた、お孫さんを背負つたお婆ちゃんが。「まあ、面白い子…あなたもよう一人ひとりの相手をしてあげてじゃんけん、子供達も喜んで…」

「毎朝この調子ですよ。」「まあ面白いこと、それじゃ毎朝がたのみでええですのー。」

子供達と出会わない日は、「今朝はどうしたんかの。」と気になったものだ。

或る日、今朝の子供達の通る道は、いつもと違って田んぼの向うの道を通っている。今朝は遠く離

れているから、ジャンケンはお休みかと思いきや、田んぼの向うから「おはよう」の声がかかってきた。

嬉しいではないか、遠くからでも声をかけてくれるとは。早速「おはよう」を返すと、こんどは「ジャンケン」と言つて手を上げているではないか。「ジャンケン」と言つても遠くではチビツ子の指は見えんじやあないか。

まあ、せっかくだから応えなくつちやあと思つて「ジャンケン・ポン」とやってみたが相手は何を出したのかわからない。すると向うから、大きな声で「僕グー、おじさんは？」ときた。そこで

「チョキ」と言つてやればよいのに正直に「パー」と答えたら、その子「あーあー、負けた。」それなら大きい子が、「お前馬鹿じゃのー、お前の方を先に言うけん負けるんじや。おじさんの方を先に聞けえやあー。」

まあ、ざつとこんな、束の間の「ふれあい」である。

さて、あれから八年が経つた先

日のこと、あの時のチビツ子少年と、あの当時の道でバツタリ出会つたのである。八年も経つと、こちらは全く顔を覚えていないのに、その子は覚えていたのである。背の高さは私とほぼ同じ、その少年私の顔を見るなりニッコリ笑つて何か言いたそうな素振り、

「この子、わしを知つとるんかの？」とケゲンそうに見返すと、この少年、きまり悪そうにジャンケンの仕草をするではないか。そこで思い出した八年前のことを、

「あのときのジャンケン坊やだ」「よく覚えてたね、大きくなつているんで、おじさんはわからんかったよ…：今は何年生？」「中三です。」「道理で大きいと思つたよ、それじゃこんどは高校生か。よし久しぶりにジャンケンでもするか…：」

八年振りのジャンケン・ポンは私の負け、しかし、よく覚えていてくれたものだ。嬉しかったなあ。

その少年、ジャンケンに勝つたら嬉しそうにニッコリ笑つて、

「さようなら。」の一言を残して、手を振って立ち去つて行つた。

「あの子、どこの高校へ行くのかな、どこでもよい。今の素直な心をいつまでも持ち続けて頑張れよノきつと立派な青年になることだろう。」こんなことをつぶやきながら、暫らく少年の後姿を見送つた。

さわやかな、出会いであった。

編集後記

この「ふれあい」の編集については、皆さんの御協力を得ながら、平成二年度から携わつてきました。振り返ってみると、僅か四頁の紙面を埋めるのにきゅきゅとして、下手な写真を並べてごまかしてきました。

同一人が永くやっていると、自然ワン・パターンになり、できたものは味のないものになります。そこでお願ひ。新年度からの編集の仕事(年二回)、「わしが、やってみようか。」と思う方を捜しています。

御一報下さい。広報部竹下(☎三九一五五八七)か、公民館でも結構です。お待ちしております。

あいさつで ふくらむ
人の和 地域の和

廿日市市青少年育成
市民会議入選標語